

友達であること

河内愛子
こうち

小学校の仲良しというものは、特別な理由でもなければ、進学先がちがうとつながりは消える。旧姓・安住典子さんもその一人だった。仙台市立上杉小学校をはさんで、私たちの家は東西に離れていたし、行ったり来たりが多かった記憶もない。彼女は県立第一高女に進み、私は私立の女学校に入って、再会した時はすでに六十歳を過ぎていた。第一高女に進んだがむしろ連絡が途切れなかったのは、大学の理学部を出て、女子高校の教師になり、独身で定年まで働いた相田春子さんである。

「定年で暇ができたから、これまで行けなかった所にいろいろ行ってみるつもりなの。皮切りを山形にするわ」

彼女が言ってきたのも二十年以上前だ。山形市のいわば観光スポットを歩きながら、第一高女に行った旧友の消息を聞いているうちに、思わず声をあげた。

「あー、安住さん！ なつかしい。今どこにいるの。住所わかる？」

彼女には忘れ難い思いがある。私が戦災孤児になり、伯母と二人で住んでいた住居に、典子さんがひよっこり現れたのは、敗戦後一年もたない一九四六年の夏だった。当時の女学生は制服などほとんど持たず、親の着物を仕立て直したモンペと上っ張りにたぶん三つ編みのおさげ姿だったと思う。日射しはざらざら暑く、帽子はかぶっていなかった。

「いとこが尚綱しやうたけに入ったので、きいてもらって、やっと山田さんの居場所がわかったの」

と彼女は言った。細身で小柄。にこにこしているが、無口であり目立たぬ子供だった。ただ脚がとても速く、クラス対抗でも市内の学校間競走でも、いつも選手にえらばれていたことが印象にある。

第一高女は仙台駅に近く、空襲で全焼していた。尚綱までの焼け野原の道を辿って、ここに訪ねてくれた理由がよくわからない。何を言ったらいいかと思いつかず、私はお入りなさいとも言わず黙って立っていた。せめてひと口かふた口のお茶菓子でもあるといいのに。どこの家にもおやつなど全くない時代である。恐らくは私を案じて来てくれたのだろう。でも私は人から同情されるのなんか大嫌いだ。はじめに暗い顔もしていないことに少しほっとしたようにして、彼女は帰って行った。あれからずっと典子さんの消息も知らずにきたが、照りつける知らぬ道を三キロぐらい歩いてきた友達に一杯の水も出さず、ありがとも言わず別れてしまったことが、自分の中の消えない傷になっていることに、相田さんのおしゃべりで、私は初めて気づいたのだった。

相田さんはすぐ、彼女の住所を調べて知らせてくれた。女川おながわに住んでいることがわかった。その頃、私は列島の海ばたに次々建設されていく原子力発電所の建設反対をしている若い友人が数人いて、専門家の講演会をしたり、スリーマイル島やチェルノブイリに関する映画を観に行ったりしていた。女川原発が建つ以前から典子さんはそこにいるのかもしれないが、怖い所に住んでいるものだ。

手紙を書いた。焼け跡の知らない道を遠い中島なかじま丁まで、もとの同級生を訪ねて下さったあなたを、立ち話だけでお帰ししたこと、忘れられずにいますと。

その後の電話でわかったのは、彼女がやがて第一高女から石巻高女に転校し、女川の海鮮問屋に嫁ぎ、十年前に夫を亡くし、独りで商売を続けていること。息子夫婦は共働きだから孫たちの面倒も見なければならぬ。まるで女中よ、あはははは、という話だった。

気がついたことだが、十二歳から六十代同士に一足飛びした電話の会話は妙なものがある。相手の姿かたちも想像できないし、共通の話題に何がいいかもわからない。そのうちお会いしましょうね、で受話器をおいたが、年の暮れ、大きい段ボール箱が届いたのにはびっくりした。箱の中にはぎつしりと、超上等品のまぐろのトロ三本、いくら、数の子、たらこ、筋子、ひらめ、かれい、手を出したこともない高級品ばかり入っていた。呆然として声も出ない。

「凄い高級品をこんなに山ほど、何事なの、いったい」

どつしり落ち着いた声で、彼女は笑った。

「山田さん、あれはね、あなたにあげたんじゃないの。ご両親にあげたのよ」

子供の私はもちろん、当時の両親も知らなかったろうことを、彼女は語った。

典子さんの父親は石巻の網元だか船主の長男か次男だった。資産家である。だがその父親は家業を継ぐのを嫌い大学を出るとジャワ島に渡り、コーヒー園を経営する。典子さんは兄三人の下末っ子。親は子供の教育のために上杉小学校の近くに家を建て、叔母さんと女中さんに子供たち四人を預けていた。

「うちには大人の文学全集も漱石全集もみな揃ってたわ。でも子供の本はなかったのよね。あたしは本大好きの子供だった。山田さんそこには子供の本がたくさんあったじゃない」。その通りでした。

「だから山田さんここで、あたしは小川未明も宮沢賢治も綴方教室もみな読んだのよ」

ところが私はおぼえていないのだ。彼女、そんなにうちに来てたかしら。父が装幀の美しいハードカバーの『風の又三郎』を買ってくれたのはおぼえているが、大して好きではなかった。私のお気に入りには『ピーター・パン』や『家なき子』のような翻訳物だったから、賢治は泥くさく思えたのかも。

「今思えば、兄ばかり三人で親はいない。淋しかったんでしょね。あなたの本棚の前に座りこんで、夕方暗くなっても動けないの。ご両親はいつもにこにこして優しくかった。おそくなるからお帰りをなさい、とは一度もおっしゃらなかった。忘れられないの。お送りしたのは、あの頃のお礼」
心が疼いた。二人に聞かせたかった。

「仙台空襲のあとには、女学校の帰り、あなたを捜して歩いたのよ」

「たぶん空襲の二、三日後だろう。父の遺体は片付けられ、もちろんそこに私がいるはずもなかった。そして小学校の友達の話は、全く知らなかった。」

三年続けて年の暮れになるとゴージャスなプレゼントは届いた。酒と美味な海の幸に眼のない夫は、こんなに美味いまぐろは生まれて初めてだと大喜びだった。三年後、典子さんは不況でこれ以上は無理と店を閉めた。それから秋ごとにピチピチはねる銀色のサンマがどかんとくるようになる。「こんなにたくさん、どうして食べるのよ!」。「近所に分ければいいじゃない。刺身にすると、すつごくおいしいんだから」と事も無げに彼女は言う。夏に私は桜桃を送る。つまり年に二回はおたがいの声を聞く。「そのうち会いましょうね」が決まり文句だが、いつになるやらちっともわからない。どっちも忙しいのだ。しかし、いずれその日があることを、二人とも疑いはしなかった。
国政選挙の季節がくると、彼女は身内の民主党の議員の選挙本部までやっているらしい。小柄なほっそりした子供は今や恰幅の良い一族を率いる大小母さまになっているらしい、といつのまにか

私は想像していた。最後に彼女はご両親によろしく、と必ず笑った。

二〇一一年三月、東日本大震災が起きた。三陸海岸には昔からくりかえし津波がやってきた。しかし今回ほど規模が大きく一万余千人もの生命をうばった津波を、我々の世代は知らなかった。福島原子力発電所の爆発まで同時に起きるとは想像を超えていた。裏日本に位置する山形県は、東北の県の中では他県から逃れてきた人を迎えるほか、直接の被害は一番少なかった。第一高女に入学・卒業以来、どこにいるかも知らずにきた四人から、典子さんの安否の問い合わせがきた。相田さんから「山田さんならわかるかも」と聞いたのだろう。だが女川町もまた壊滅に瀕した三陸沿岸部の一つであること以外、伝える情報がない。新聞もネットも身元のわかった人の姓名は所狭しとあらわれ、友人・知人も未知の名の間に出てくる。生きて避難所にいる人ばかりだ。これはほっとする。国じゅうの心が被災地に向いているのだった。不意に、ざらざら照りつける陽に汗をたくさん浮かべ、ようやく会えた私を見て、嬉しそうに笑ったおさげ髪の少女が心に浮かんだ。彼女を捜しに家から一歩も出て行こうともしない今の自分! 情けないことだ。

四月末に、ようやく高校の教師をしているという彼女の息子さんの電話があった。

「遺体がまだ見つからないのです。あの日、家には母親と僕の妻、妻の母と三人がいました。まだ三人とも行方不明。僕は職場にいたし、息子たちは成人して女川にはいなかった。三人ともまだ瓦礫

の下にいるんでしょ」

そこで早口の電話は切れた。下の娘さんは新潟で家庭を持っていると聞いたことがあった。死に物狂いで親たちを捜している典子さんの息子さん、娘さんたち。何万もの同じ姿の子供や親を捜し回っている家族や地域の人々の姿。そして私は、典子さんの人生のほんの僅かの部分しか知らなかったことがわかった。なのに彼女は半世紀以上も昔の私の親たちを忘れずにいてくれた。死者は生きている者の記憶の中でだけ生き続ける。典子さん、あなたはそのことを教えてくれた。遠い親族でさえもなかった友の親のことを。

五月に入って、娘さんから報告があった。瓦礫の下ではあったが、生前と変わらぬ安らかな表情の母に会えたこと、明るい誰にでも温かい人であったということ。

典子さん、あなたに私ができることは生きているあいだ、あなたを忘れないことだけ。しょっちゅう忘れるにしても、それはごめんなさい。大きな笑い声、ぴんぴんはねたサンマの銀色などなど、ほんとにありがとう。

二つのおさげをたらしした少女のあなたを思いながら。

